「しょせんバイトでしょ」　in グラインドハウス

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「しょせんバイトでしょ」　ｉｎ　グラインドハウス

【Ｎコード】
Ｎ７０３５Ｌ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
うーむ。もうちょい書き足した方がいいかな。でも思い浮かばない。。。

（前書き）

グラインドハウスとは、Ｂ級映画を複数上映する映画館のことです。Ｂ級映画のいいところは、お金がもうからない代わりに実験がたくさんできる所にあるとオレは思います。

出社拒否してる。生徒と喧嘩したとき、「しょせんバイトでしょ」と言われ、その一言がざっくりときて、会社に行けなくなってしまった。

「先生。早く元気になってください。そして校舎に来てください」

「わしはもう駄目です。かなりへこみました」

「そんなあ」

室長はすごく心配している。ただもう立ち直れない。

うちの塾は室長以外、みなバイトである。低価格が売りのため、社員を雇用することができないのだ。ゆえに低賃金であり、３４にもなって社会保障がまったくない。心や体を痛めながらこれも世のため生徒のためと思い、必死にがんばってきた。

それなのに「しょせんバイトでしょ」とは。

自衛官と同じだ。命をかけ国を守ってるのに「人殺しだ」と罵られ、犯罪者扱いされる。

いつから日本はこんな狂った世の中になってしまったのだろう。バイトや派遣に対し世間は自己責任だという。じゃあ、なぜ非正規が全労働人口の３分の１、約１８００万人もいるんですか。どう考えても企業が雇用責任を果たす能力がないだけ。

完全にやる気がなくなってきた。たまに生徒に「がんばれよ。がんばって社員になれよ」と言われる。お前こそ勉強がんばれと言いたいが、それより何より、すでにがんばってる人に向かってがんばれというのがどれほど危険なことか生徒はわかっていない。下手すると自殺してしまう。バイトがどれほど苦痛で疲弊感が多いか生徒はわかっていない。わかっていたら「もっと休めよ」と言うはずだ。

もう何もかもいやになってしまった。生きてること自体がいやになってしまった。

オレはビルの屋上に登り、飛び降りた。

登校拒否してる。塾で先生と喧嘩したとき、「頭悪いくせに」と言われて、それがぐさっときて学校に行けなくなってしまった。
「ロリ華さん。早く元気になって学校に来てよ」
「もうあたしだめです。相当へこんでます」
「そんなあ」
学校の先生は心配してる。でもあたしもう立ち直れない。
あたしは確かに頭はいい方ではない。てか、悪い方だ。六年生にもなるのに、たし算をよく間違えたりする。でも怠けたら立派な大人になれないと思い、一生懸命勉強してきた。わからないなりに授業をしっかり聞いてがんばってきた。
それなのに「頭悪いくせに」とは。
精神障害者と同じだ。本人は別に精神に障害を持ってるつもりはないのに、社会に適応できないというただそれだけの理由で「キチガイ」認定される。本人は普通に生きてるだけなのに。
いつから日本はこんな狂った優しさのない時代になってしまったのだろう。成績の悪い子に対し、世間は「くず」だの「ごみ」だの言う。本当かよ。その子がおばあちゃんの荷物を持ってあげたり、みんなを笑わせて楽しませるキャラだったとしても、成績が悪いというだけでなぜクズ扱いされなきゃいけないの。みんなにいやがらせしても万引きしても成績がよければそれでいいってえの。
完全にやる気がなくなってきた。たまに塾の先生に「がんばれよ。がんばらないとゴミになるぞ」と怒鳴られる。お前こそ教える技術をもっと磨けと言いたいが、それより、すでにがんばってる生徒に対して、がんばれと言うことがどれほど危険なことか塾の講師は気づいていない。下手すると自殺してしまう。生徒がどれほど苦痛の疲弊感の中で生活してるのか塾の先生はわかってない。わかっていたら「もっと遊べよ」と言うはず。
もう何もかもいやだ。生きてるのがいやになっちゃった。
あたしはビルの屋上に登り、飛び降りた。

オレは落下しながら上を見上げびっくりした。
「ろ、ロリ華？？？？？」
あたしは落下しながら下を見てびっくりした。
「ち、珍先生？？？？？」

「うわあああああああああああああ」
「うわあああああああああああああああ」

オレは力をいれ、上に向け、巨大なおならをした。「くさい！！！」
ガスの力でロリ華の小さい体が少し浮いた。
どしゃーーーーーーん！！！
オレはアスファルトに激突した。ロリ華は、ふわりと着地した。
「珍先生！珍先生！」
オレを抱きかかえるロリ華。
「うう。オレはバイトに誇りを持ってるんだ」
「しゃべっちゃだめ！」
「お前を怒鳴るのだってお前が憎いからじゃないさ」
「わかってる！わかってるよう！」

あたしは珍先生を背負った。救急車じゃ間に合わない。近くに病院があるので珍先生をおんぶして走るしかない。「重い」珍先生はメタボリックなのでしんどい。「ロリ華、もうあきらめろ。オレはもうだめだ」
「あきらめちゃいや！！」
あたしは、絶対珍先生を死なさない。むかつくこと言われたってあたしの先生だもん！！
病院に到着。がんばれば何でもできる。
さっそく、珍先生をおんぶし、受付へ走る。

「この方、職業は？」
「塾の講師です」
「社員ですか？バイトですか？」
「バイトです」
「ちょっとうちの病院はバイトはお断りしてるんです。お金が払えない人が多いから」
「そんなあ！！！」
何ということなの！そんなバカな話が！
「珍先生、健康保険とか払ってるよね！」
「うう。それが払ってないんだ。払うと生活ができなくなるから。うう。もうだめだ」
「そんなあ！！！」
「そういうわけですから今回はお引取りください」
あたしは怒りでわなわなしてきた。ここで死んだら、次回なんてあるわけないよ！

おしまい（現実の厳しさをかみしめたい人はここで読み終えてください）

つづく（いや、ハッピーエンドがいい！　という読者は以下をお読みください）

連載第二回
「ところであなたの家は？」
「あたし？」
「そう。社員？バイト？」
「てか、経営者よ。パパは大会社の社長やってるの」
「おおっ」
受付の目つきが変わった。

ロリ華はこれはひょっとするとと思った。
「金持ちも金持ち。庭にプールあるよ」
「ほう。ほう。それは素晴らしいですね。それではあなた、学校の成績は？」
「え」
ロリ華はぎくりとした。
「先月の算数のテストと漢字のテスト、何点だった？」
「うう。算数は二点。漢字は五点」
「十点満点で？」
「百点満点です」
ロリ華はうつむいてしまった。
「じゃあだめね。院長の方針で、うちは成績の悪い子どももお断りなの。頭の悪い子は助ける価値がないってことね」
ちきしょー！なんてめちゃくちゃな病院なんだ！！！！このままじゃ珍先生、本当に死んじゃう！！！！
「やいこら。ブサイク」
あ。珍先生。
「オレの悪口はいいが、ロリ華の悪口は許さぬ。ごほっごほっ」
「ちょっとしゃべっちゃだめよ！てか、珍先生、いつもあたしの悪口を言うじゃん！」
「それはSだからしょうがない。でも、人に言われるといやなんだ。オレの愛する人だから」
「珍先生！」
なんだか感動的なシーンだ。
「ごほっごほっ」
「ああん！どうしたらいいの！」
奥から医者がやってきた。
「あ。こら。こんなとこにいたのか」
「え」
医者は受付嬢を連れていこうとした。

「？？？？？」
「いやあ。すみませんねえ。この女、精神科の患者で自分を受付嬢だと妄想してたまに勝手にやるんだよ」
奥からホンモノの受付嬢らしき女性がふらふらになりながらやって来た。
「鉄パイプで殴られたと思ったら、いつの間にか、トイレで縛られていた。いててててて」
あたしと珍先生を見る。
「なに。このメタボリックな男性、重態じゃない！」
「はあ。でもムリなんです。珍先生バイトだから」
「え」
「バイトだからお金払えないの！」
「関係ない！お金なんかより命の方が大事！おい、医者、早く担架持ってこい！」
「あいよ！姐さん！！」
うわあ。かっこいい！！！！！！！

おわり（ハッピーエンドがいい読者はここまでにしといてください）

つづく（ギャグが好きな人は引き続きどうぞ）

連載第三回
受付のお姐さんは珍先生を持ち上げた。
「うわああ。怪力いいい」
「おい。医者。投げるからキャッチしろ」
「あいよ！」
医者は階段を上り、踊り場へ出た。
医者も怪力。珍先生をキャッチした。
「痛い。痛いよう。怖い。怖いよう」
珍先生は泣きそうだ。

てか、エレベーター使えよ！
そんな感じでキャッチボールしながら七階（手術室がある。なんでそんな上に！）まで行った。
「おおと。いよいよ。ゴールですか」
「すごいですねえ」
「うわあああああああああああああ」
観客総立ち。いつの間にか、ラクビーの試合会場みたいになってる。
が、医者がちょっと思い切り投げすぎたので、あねさんがキャッチしきれず、珍先生の巨体が廊下の窓を突き破った。
がしゃーーーーん。
珍先生は落下した。
「珍せんえーーーーーーーー！！！！！」
「うわあああああああああああああ。どういう意味じゃあああああああああ」
わあああああああああああああああ。
観客は総立ちで燃えていた。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7035l/

「しょせんバイトでしょ」　in グラインドハウス

2010年10月18日00時49分発行